

宮内氏

宮内 創立は祖父の代の昭和12年(1937年)で、宮内産業に社名を変更して55年になります。毛皮の取引からスタートし、その後、床革、ベロア、ランドセル、自動車のステアリングやシート用へと移り変わり、現在は

吉村 今回のエコレザー座談会は、長野県・飯田市の宮内産業(株)の宮内社長に参加いただきました。工場は風光明媚な環境の中にあり、環境に負荷を掛けない製革に取り組んでいるタンナーです。はじめに、会社の経歴、業務内容からお聞かせください。

生産は時代とともに変わり今はランドセル用革



飯田市の工場外観

ランドセル用のコードバン(馬の尻の革)の生産が5割を占めています。

メーカーとの直接取引で市場変化に対応してきた

ランドセル以外では、家具用の革が2割ほどあり、コードバンの端材を活用した財布・小物などランドセル以外の外注で製品化しているものが2割ほどあります。自動車向けの革は5%ほどです。

ランドセル需要は、5年ほど前は大変厳しく、製革業者もランドセルメーカーも撤退が相次ぎました。また、その間に大手タンナーの倒産もあり、結果としてコードバンを扱うのは、当社と他1社のみという状況になっています。

エコレザー座談会

宮内 清彦氏

(宮内産業(株) 社長)

吉村 圭司氏

(NPO法人日本皮革技術協会 副理事長)

稲次 俊敬氏

(NPO法人日本皮革技術協会 副理事長)

主力はランドセル用コードバン。
日本エコレザーで差別化する

日本エコレザーの6つの条件



- 1 天然皮革である
- 2 発がん性染料を使用していない
- 3 有害化学物質の検査をしている
(ホルムアルデヒド、重金属、PCP、禁止アゾ染料)
- 4 臭気が基準値以下
- 5 適切に管理された工場で作られた革
(排水、廃棄物が適正に管理された工場で製造)
- 6 染色摩擦堅牢度が基準値以上(※)

※染色された色が摩擦や使用条件にどれだけ耐えるかの指標



吉村氏



稲次氏

稲次 馬革の中でも特にコードバンは高級品として根強い人気があり、御社の看板でもあり、強みだと思えます。ただ、馬革そのものは、軽くて強いという特徴がありますが、キズが多く、歩留まりがよくありません。

宮内 馬革を余らせてはもったいないと思ひ、端材などを活用して製品化していますが、あまりやりすぎると、お客さま製品メーカーとのマッチングもあり、難しい面もあります。

弊社は、革の登録商標としては「アルプスカーフ」があり、20年前から使っています。宮内の革というよりも、アルプスカーフの革というように、お客さまからは親しまれています。ただし、実際には銀面付きのカーフを手掛けたことはありません。

ランドセル、自動車、家具の革は、問屋を通さない取引をしています。当社の経営方針としても、昔から営業マンが製品メーカーに直接売ってきました。海外への売り込みもそうです。また、原皮の仕入れについても、商社を介さずに、私自身が海外に赴き、よく吟味してから直接仕入れていきます。

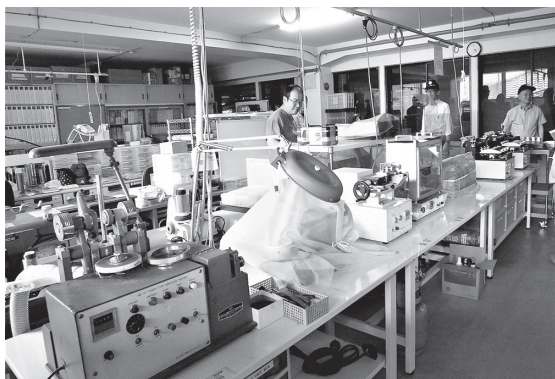
こういった姿勢が、マーケットの変

化に適時対応することができ、何にでも対応できる企業として、生き延びることができたと思っております。

10数年前からクロムフリーで環境に取り組む

吉村 ホームページを拝見しましたが、モノづくりの考え方としてクロムフリーへの取り組みを上げています。その点はいかがでしょうか。

宮内 クロムフリーは10数年ほど前に又メ革で取り組みました。ただ、ここでいくつかの問題がありました。一



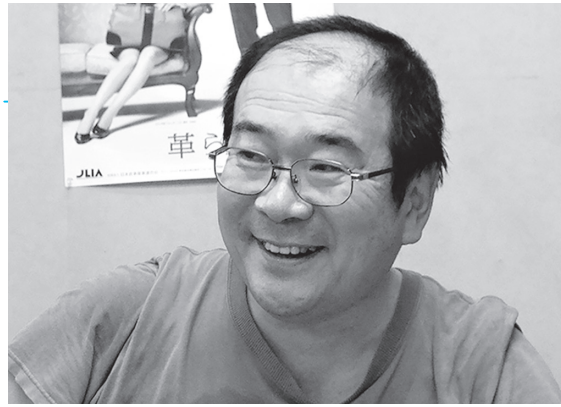
工場内にある試験室

つは、又メ革は耐水性が低く、銀面から水を吸ってしまうという問題です。このため、防水剤で対応しました。また、子供達が持つランドセルに使うには、重くなってしまうという問題があります。さらに塗膜の割れなどの耐久性が落ちるといった欠点があり、又メ革ランドセルについてはそれっきりになりました。

次に自動車で取り組みました。ステアリング(ハンドル用)は熱でシワを伸ばしながら巻くために、耐熱性の高いクロムレザーしか使えませんでした。このため、シート革に参入しましたが、結局利益につながるまでには行きませんでした。

ただし、ランドセル以外の一般のバッグで、又メ革を使いたいといったリクエストをいただき、クロムフリーの革を作ることになりました。

長野県は1998年の冬季オリンピック開催を機に、排水処理が大変厳しくなりました。同時にクロムの排水基準も厳しくなったため、会社としても99年に浄化槽の増設を行うとともに、総排水量の低減にも努めてきました。しかし、現在では、生産量が落ちているので、この大きな浄化槽は過剰な設備でもあり、非効率となっています。



宮内氏

ランドセルメーカーの要請で エコレザーを取得

吉村 認定されている日本エコレザーについての取り組みや活用については。

宮内 日本エコレザーについてはランドセルのメーカーからの要望があり、認定を取得しました。1品種ですが、色は数種類の認定を取っています。

実はランドセルに使うコードバンについては、全てエコレザーにしようといった意見も社内ではあります。しかしそうなると、最初にエコレザーをリクエストしてきたメーカー様の市場を潰すことになるかもしれない。いま、その件に関して調整段階で、そのメーカー様から許諾が出れば、1、2年後にはすべてのランドセルの革については、日本エコレザー認定のものにしたいと考えています。

われわれタンナーは、イタリあのレザーのように、革自体をブランドイングし、その革自体で評価されたいと思っています。しかし、お客様は、そこまでは望んでいません。むしろお客様は、その革を自分たちで困り込んでしまい、ほかの製品メーカーとは違

う面を出したいと思っています。ですから、会社全体の戦略として、エコを旗印に、タンナーが単独で認定を取るわけにはいかないのが現状です。

私も、工場の横の川で鮎釣りができるまでに、排水処理を管理した会社ですが、それを戦略的に謳えないところが非常に残念です。

稲次 日本エコレザーを使った、安心・安全マークをついたランドセルを、たとえ他よりも割高になっても、おじいちゃん、おばあちゃんは、お孫さんに買って上げたいと思うはず。日本の文化でもあるランドセル



工場内に並ぶコードバンの革

を、すべてエコレザー認定された革にするような戦略が取ればいいですね。

宮内 一時は、ランドセルの9割がクラリーノになっていましたが、少子化で全体のパイが縮小する中で、本物志向、高級志向のおかげもあり、革の需要が少しずつ伸びてシェアも上がってきています。

こうした中で、宮内産業のコードバンをもっとアピールしたいと考えています。

稲次 人工皮革、合成皮革は、安心・安全な素材であることはどこも謳っていません。本革に加えて、安心・安全ということも謳えれば、さらに有効なアピールができるのではないのでしょうか。

仕掛けるのは、どこもやらない、やっていない今だと思えますが、いかがでしょうか。

宮内 同じ本革であれば、素材感や高級感といった面からその良さを比較することになりますが、もうひとつ、エコレザーであることの付加価値は、差別化の主要なキーワードになると思います。



稲次氏



吉村氏

エコレザのカラー展開は濃い色で申請する

吉村 コードバンでの日本エコレザの認定は、すでに更新もされていいますが、ほかの革でも申請する考えはありませんか。革は同じ素材でも、必ず色のバリエーションが求められると思いますが。

宮内 われわれには数100種もの色展開をしています。ランドセルはただ基本色がありますが、家具に使われる革は、メーカーごとに色のレシビが決められており、色の名前も独自のものが付けられています。同じ赤でもメーカーごとにいろいろな赤があるのが現状です。これを全てエコ申請していたら、大変な費用になります。



工場内は整理整頓が行き届いている

稲次 ある毛皮業者様からの要望で、マイナーチェンジされたことですが、3原色を組み合わせる際に使う染料の割合が決まっていれば、一番濃い色

で申請をし、認定を取れば、それよりも薄い色のものであれば、改めて試験をする必要はなくなりました。ただし、申請時におよその配合割合の表記と、色の組み合わせバランスで変わってくる染色堅ろう度(色落ち)の試験結果は必要となります。これも基準値を満たせば、認定を取得することができます。

宮内 これまで取引先のメーカーが決めてくるカラーレシビについては、非常に多色となり、エコレザ申請はとも無理だと思っていました。が、いま聞きしたような状況であれば、申請しやすくなります。

今後はエコレザの認定取得数を増やすことを考えていきたいと思えます。